

韓国における大谷コレクションの展示および調査研究の現況

関 丙 勳

近頃、東アジア諸国においてつきつきと開館を迎える大規模の国立博物館における展示の流れをみると、一つの共通点を見出すことが出来る。それは、自国の歴史と文化の流れを説明するために、周辺文化圏との交流の歴史やその地域的特徴などを立体的かつ巨視的に見せようとする動きである。

去る二〇〇五年一〇月一五日にオープンした九州国立博物館は、「日本文化の形成をアジア史的視点から捉える」というコンセプトをその出発点としているし、続いて同月二八日に開館を迎えた韓国ソウルの龍山というところに位置する新しい国立中央博物館もアジア館を新設し、展示の主要な軸の一つにしている。仄聞するところによると、北京オリンピックに備えて建設を進めている中国国家博物館も同様の施設を設けると言う。

十年余の長い役事の末、歴史的な開館を迎えた韓国国立中央博物館は、その外形の規模としては世界六大博物館の

一に数えられると言うが、イギリスのブリティッシュ・ミュージアムやアメリカのメトロポリタン・ミュージアムなど、世界屈指の博物館とは違って、展示品のほとんどが自国出土の遺物や文化財で埋められているため、韓国の歴史と文化をアジア史の一環として、周辺の文化圏と比較検討し難い状況にある。

しかし、国立中央博物館には、幸にも二〇世紀の初め大谷探検隊によって収集された約一五〇〇点におよぶ中央アジア出土遺物が收藏されていて、中央アジアのシルクロード地帯で形成された華麗な仏教文化をはじめ、北アジアの遊牧文化や西アジアのオアシス文化等が、文明の交差点である中央アジアにおいて熔融され成り立った独特な地域文化の片鱗および韓国文化との横の連関性を窺い知る重要な機会を提供している。

本稿では、韓国国立中央博物館（以下、中央博と略す）の所蔵品のうち、外国の遺物としては数少ないコレクション

ンとも言える中央アジアの遺物について、解放以降今日に至るまでの展示の経緯、そして近年における調査・研究の現況などを簡単にまとめてみるつもりである。

*

朝鮮戦争以来、一九八六年の常設展示に至るまで、中央アジア遺物は基本的に未公開の状態であったが、部分的には公開されたこともあった。朝鮮戦争のとき釜山に移された博物館は、休戦後にも景福宮にもどることが出来ず、結局は南山の舊民族博物館に移転開館し、一九五四年一月には徳寿宮の石造殿（韓国最古の西洋式建物）を博物館として開館した。戦争後、中央アジア遺物が少数ではあるが一般に公開されたのは、この石造殿での陳列が初めてであったと推定される。一九七〇年七月一日に発刊された『博物館ニュース』第一号には、博物館の東館第三階の第七室に中国（唐）—西域遺物室が配置され、彩色土器、土製人形像、明器、西域絵画などが陳列されていると伝えている。そして西域遺物がこれよりもっと整理された形で公開されたのは、中央博が景福宮内に新築開館（一九七二年八月二五日）したときの展示であった。

月六日、景福宮内に新築開館した中央博（現在の国立民俗博物館）へ慶州より一括搬入された。このようにして西域遺物は実に二十三年ぶりに再び景福宮に戻ることとなったのである。国土が分断され、いつ再び朝鮮戦争のような大災難が押し掛かるとも知れないという懸念のため、慶州に移された中央アジア遺物は、長い間中央博に移管されなかったし、またソウルの博物館側もこれらの遺物を急いで搬入しようとしなかったと言う。

新築された中央博では、「東洋室」を設け当館所蔵の外国文物を常設展示するようになった。すなわち約八〇坪の特別展示室に、楽浪遺物一二五点と西域遺物四五点、が陳列され、「中央アジア遺物は次のようなものが展示された。

古土器（25）、塑像裝飾物断片（29）、素焼土器破片（51）、塑像「佛頭」（529）、男女合体図（553）、石刻佛像（559）、素焼佛像（563）、壁画「千佛像」（587）、壁画「千佛像」（600）、素焼器物（633）、「粘土」黒色人形（665）、粘土製人形（668）、粘土製佛坐像（676）、粘土製佛像（679）、粘土製人頭（690）

「括弧のなかの数字は、大谷探検隊の報告書である『新西域記』の附録「朝鮮総督府博物館中央亜細亜発掘品目録」にある遺物番号」

一九八六年八月二日、中央博は旧中央庁庁舎（日帝時代の朝鮮総督府庁舎）を博物館として改装し、新しい開館

を迎えた。展示空間の大幅な拡張とともに面目を一新した中央博のなかでも、ひとときわ世の中の人々の注目を集めたのは、当館所蔵の外国文物のうち白眉ともいべき中央アジア遺物すなわち大谷コレクションの常設展示であった。

当時、新博物館の四階には約二〇〇坪規模の「中央アジア室」が新しく設けられ、日帝より解放されてからほぼ未公開の状態であった中央アジア美術の世界的至宝が本格的に公開されることになった。公開された遺物は壁画、絵画（佛画）、佛像彫刻、土器、土俑、生活用品などを中心に一五〇余点におよぶ名品であった。

特に中央アジア室の一角には、西域の石窟寺院で剥ぎ取った壁画片約二〇点が展示され、中央博所蔵の中央アジア遺物の水準と重要性を内外に顕示する契機となった。これらの壁画は、大谷探検隊が駱駝に載せ運搬可能な大きさで石窟寺院の壁面から剥ぎ取ったあと、これを日本にもってきて木材の枠のなかに固めたため、余白部分を埋めた石膏などの重さも加わって大変重いものであった。また壁画には顔料層の下部に、まだ石窟壁面の土が付着されている状態であるため、中央博はこれらの壁画を木材の枠のままですく傾けた形でならべ、壁画の質感と石窟寺院の雰囲気や間接的に味わうことの出来る異色的な展示であった。

このように解放以後はじめて本格的に公開された中央アジア遺物は、約一〇年間常設展示されていたが、日帝時代の残滓を清算するという名分のもとで、中央博として使用

されていた総督府の建物を解体撤去する過程において、博物館が臨時博物館（現在の国立古宮博物館）に移転（一九九六年）する際に、展示面積の縮小のため再び収蔵庫に格納される運命をたどることになった。

二〇〇五年一月二八日に開館したソウル龍山の新しい中央博には、考古館、歴史館、美術館、美術館、寄贈館とともにアジア館が展示棟三階の南側に開設された。アジア館には、インドネシア室、中国室、楽浪遺跡出土品室、新安海底文化財室、日本室とともに中央アジア室がアジア館の独立した展示空間の一つとして開設され、再び一般に常設公開されている。

新しく開設された中央アジア室（584・43㎡）には、現在の中国新疆ウイグル自治区の各地で出土した多様な遺物約二〇〇余点が三分野に分かれて展示されている。ベゼクリクやキジル石窟寺院の壁画、幡、佛画、佛像などで構成される宗教文化、青銅器、土陶器、木製品、織物製品など中央アジアの住民が日ごろ使っていた多様な日常生活用品や住居地跡などで出土した遺物で構成される日常生活文化、トゥルファン・アスタナ古墓群などで出土した伏羲女媧文、鎮墓獸、墓誌、人物俑など多様な副葬品がならべられている埋葬文化の三つの区画に多くなっている。

中央アジア室の入口には、まず大型地図を掲示し、中央アジアの地理的概念を一目で把握できるようにするとともに、展示説明の補助装置として大型デジタルTV（PDP）

画面にベゼクリク石窟寺院の壁画、特に誓願図を中心にその概要を説明する映像資料、アスタナ古墓群とその出土遺物を説明する映像資料、大谷探検隊の概要を説明する映像資料を各々三分前後の長さで編集し放映している。

今回の新しい展示が、一九八六年の中央アジア室の展示と異なる点は、まず、いままでの研究調査の結果をもとに展示品に対する説明、すなわち遺物の名称および出土地、時代比定などがより確実に紹介されている点である。例えば、ベゼクリク石窟寺院の誓願図は唐の画風が強く影響しているため、その製作時期をほぼ全ての東西洋の学者が九一〇世紀として推定していたが、近年においてウイグル史および言語学的研究成果などを参照しながら、壁画を構成する物質に対する炭素年代測定など科学的な分析調査結果を根拠に、その製作時期を一〇一二世紀と修正した。そしてトゥルフアンのトユクから将来された摩尼教絵画断片^①は、このような学際的な研究成果をもとに今までその意味がはっきりしていなかった遺物について、新しく意味を与えた代表的な作品の一つであり、大谷コレクションが韓国に入ってきた一九一六年以来、すべての媒体を通じて初めて公開される資料の一つである。

これとともに、展示品の名称をよりわかりやすく表記することに、一般人の理解を助けようとしている点も、以前の展示と区別される差異点の一つと言える。

今後は、多様な展示遺物の出土環境と遺物の持つ意味を

より事実的に説明するため、ベゼクリク石窟寺院やアスタナ古墓の縮小模型などを復元製作する予定である。コレクションの白眉である西域壁画は、毎年一定量の壁画を保存処理し、観覧の機会をより一層増そうとしている。現在、中央博の保存科学室では一部の小型壁画片についてその保存処理を終え、次第に大型作品の保存処理にとりかかっている。壁画は作品保護のため、保存処理の終わった作品を中心に展示に臨んでいる。全ての壁画に対する保存処理が終了するときまで、大型壁画の場合、壁画についての科学的な調査結果をもとに、壁画の製作当時と同じ顔料を用いて、現状態をそのまま模写した作品を展示している。^②

*

次は、中央博所蔵中央アジア遺物の調査研究の現況について簡単にまとめてみることにする。大谷探検隊の西域遺物が日帝時代に朝鮮総督府博物館に搬入されてから既に九十年が過ぎ去った。当時の遺物譲渡をめぐる政治・経済的背景をはじめ、その具体的な面についてはまだ明らかになっていないところが多い。今後は、これらの諸般の問題点についての解明とともに、遺物ひとつひとつについて考古・美術史的な研究の進展が要求される。特に、壁画の場合、ドイツ・ベルリン民俗博物館に收藏されていた同類のもの^③の相当部分が、第二次世界大戦のとき空襲によって灰塵に帰し、中央博所蔵の中央アジア遺物の学術的重要性はますます高くなっている。

現在まで公表された中央博所蔵の大谷コレクションに関する記録としては、いくつかの図版と『新西域記』の附録として巻末に掲載されている『朝鮮総督府博物館中央亜細亜発掘品目録』があるが、そのほとんどが具体的な解説を欠いた疏略なものであり、学術的とは言いがたいものである。

東洋三国に分散されているこれら中央アジア遺物に対する研究上のもっとも大きい難点は、遺物全体についての正確な目録作業がまだ作られていない点である。これらのコレクションについての唯一の目録と言える『新西域記』の『朝鮮総督府博物館中央亜細亜発掘品目録』は、その記述内容において遺物の出土地に関する誤謬が多く、研究の基礎資料としての価値を認め難いものである。

このような問題意識のもとで、筆者は中央博に所蔵されている中央アジア遺物に対する基礎研究の一環として、一九九三年より二〇〇四年までは毎年中国の新疆地域で、主に大谷コレクションの出土場所あるいは収集された地域を中心に学術調査を行ってきた。まず発掘地を訪ね、遺物の出土状況を把握し、同じ地域で新中国成立以後に出土した同類の遺物を集中調査することによって、遺物の出土地および性格を明らかにしようとしたのである。特にウルムチの新疆ウイグル自治区博物館、新疆文物考古研究所、トルファン博物館、ホータン博物館等に所蔵されている遺物との比較調査の過程で、少なくない遺物の正確な出土地を確認することができた。また遺物の正確な用途や名称に

ついても新たに得た識見が多い。そしてベゼクリク石窟寺院やキジル石窟寺院で剥ぎ取られた壁画の断片も、探検当時、壁画を切取した石窟の番号などがまったく知られていない状態なので、これもまた現地を丹念に踏査しながら大谷探検隊以前に同地域を訪問し、写真撮影を行った西欧の諸探検隊の記録とひとつひとつ対照するよりはかなかったのである。

もちろんこの調査過程で、数十年の間、新疆の各地域で発掘と研究に携ってきた現地の諸研究者より貴重な助言を伺ったのも、問題点の解決に大いに役立ったのが事実である。

このような現地調査の結果をもとに、二〇〇〇年八月には『国立中央博物館所蔵中央アジア遺物についての総合的研究』(学術振興財団国際協力課題研究費支援・一九九六～一九九九)という報告書を作成した。この報告書の核心部分は、遺物ひとつひとつに対する正確な出土地および名称・用途・時代・形状の特徴などについて具体的に記述を試みたという点である。

一九八六年八月の開館の際に出版された『中央アジア美術』は、中央アジア遺物の重要作品をカラー図版で紹介し、中央アジア美術に対する概括的な解説が加えられた最初の図録である。しかし遺物ひとつひとつに対する具体的な解説がなく、コレクション全体の性格などに関する言及もまだ足りない点があって、中央アジア遺物全体を完全に紹介

した図録とは言えないものである。

中央博所蔵の中央アジア遺物に関する研究は、既に日帝時代における熊谷宣夫の西域壁画研究の成果をはじめ、上述のような西域遺物を本格的に紹介した図録も刊行されたり、これを素材にした葉書も刊行されるほど当時の朝鮮総督府博物館の展示品のなかで中央アジア遺物の占める比重が大きかったことを物語っている。

遺物個々についての研究とともに、日帝時代における同遺物に対する調査内容のうち特記すべき事項は、西域壁画に対する模写が多く行われたという点である。これらの西域壁画は少数のキジル風壁画を除いてそのほとんどが唐風の影響が著しいトゥルフアン・ベゼクリク石窟寺院のものがその主流を成すため、このような点でこれらの壁画と日本画との関連性に着目したかも知れないが、日帝時代に既に東洋絵画研究の一環として、朝鮮総督府博物館所蔵の西域壁画に対する模写を試みている。現在、東京芸術大学等に所蔵されているこれら壁画の模写作品は、作品の質はそう高くはないものにしても、これから遺物の保存処理や研究において重要な役割を担うことになるだろうと期待されている。

解放以後における中央アジア遺物に対する研究は、当時中央博の学芸員として在職中であつた権寧弼によつて一九七〇年代に着手されたが、本格的な研究は一九九〇年代に入ってから始まったとみるのが妥当であろう。特に一九九

〇年代に入つて中国旅行が許され、中央博所蔵の中央アジア遺物が出土、収集された新疆地域の踏査が可能になつてから、各々の遺物に関する考古・美術史的なアプローチによつて、同遺物に対する研究が具体性を帯びるようになってきた。

一九九一年には、中央博でドイツ探検隊が西域北道上の石窟寺院で切取した壁画を本格的に紹介する特別展『シルクロード美術』が開催され、西域美術に対する関心が一般にも広がる契機となつた。そしてその次の年には、ドイツ・ベルリン印度博物館 (Museum für Indische Kunst) の壁画保存処理の専門家モイザ (Wolfgang Moisa) 氏を招聘し、中央博所蔵中央アジア壁画の保存処理のためのワークショップを開くことによつて、大谷探検隊が収集した西域壁画の構造と特性を把握するとともに、壁画片を木製の枠の内部に固定させるための日本側の保存処置の過程を確認することができた。またモイザ氏の指導のもとで、小さい壁画片を実際に保存処理してみる過程で、ドイツの壁画保存処理技術を習得し、今後の西域壁画の保存処理のための方向設定にも重要な契機がもたらされた。

二〇〇一年には、東京国立博物館の中央アジア壁画の保存処理方法を調査し、続いてイギリス・ロンドンのブリテイシユミュージアム、ドイツ・ベルリンの印度博物館、ロシア・サンクトペテルブルグのエルミタージュ博物館を訪問し、中央アジア壁画の保存処理の方法と材料、そして諸

般の問題点などを整理して中央博所蔵壁面の保存処理を準備した。

徹底的な事前準備をもとに、二〇〇二年から壁面の保存処理を本格的に始めた。まず保存処理の方法、材料、そして展示方法を考慮した額縁の形などに至るまで、具体的な事項を確定し、同じ場所から持ってきた壁画を所蔵し、またこれらの壁画を既に保存処理し施行錯誤を経験した日本の技術を参照することにした。この過程で、壁画の裏面を補強する補強材など、壁画の保存処理に使われる諸材料は東京文化財研究所が過去の実験を通じてその安全性が保障されたものに限って用いることにした。

二〇世紀の初頭に諸探検隊が剥ぎ取って自国に搬出した中央アジア壁画は、これらを展示する目的で各々の国が保存処理に着手することになり、その過程で多くの施行錯誤を経験したのが事実である。ドイツの場合、壁画の裏に付けた石膏の補強材が壁画の顔料層に害を与え、すべての壁画を再び保存処理することとなり、日本の場合、木材の補強材が問題になることもあった。このような点で中央博が中央アジア壁画の保存処理の時期を最大限に遅らせ、同類の遺物を所蔵する諸国家の保存処理の過程を見極めたのかえって幸いな選択であったと言える。

今回の保存処理の過程でもっとも重点を置いたのは、いくら害のない最新の材料と技法を用いたとしても、後で発生しかねない問題点に対処し、これを再び復元処理できる

ようにする可易性であった。このような方針のもとで、まず小さい壁画片より保存処理に着手し、二〇〇三年末まで五点の壁画の保存処理を終えた状態である。

これらの壁画の保存処理、特に初期における保存処理の過程においては、東京文化財研究所の青木繁夫保存修復部長をはじめ、文化財保存支援機構 (Japan Conservation Project) 所属の山本記子、大林賢太郎、両氏の協力に負うところが多かった。保存処理の終わった壁体を支える補強材と木材枠の形態、周囲を固定させる金属の枠などは、筆者を含む展示担当者と保存科学者たちが数えきれないほどの会議を繰返しながら衆智を集めた結果、誕生したものである。

*

以下の論著目録は、一九七〇年代以後において中央博所蔵の中央アジア遺物について、歴史・考古・美術・保存科学等に関する研究論著をその対象にしたもので、新聞や雑誌等に掲載された簡単な記事などは省くことにした。ただし、外国の学術誌等に掲載したものは目録に含むことにした。

【国立中央博物館所蔵中央アジア遺物に関する論著目録】

- ① 権寧弼「中央亞細亞 壁画考——国立中央博物館所蔵壁画斗 閔聯斗——」『美術資料』第二十号（一九七七年）

大谷コレクションのうち中央アジア石窟寺院の壁画を中心に、探検の概要と遺物の意味を概括的に紹介した最初の学術論文である。

②

国立中央博物館『中央아시아美術』(三和出版社、一九八六年八月)

一九八六年八月、中央博の移転開館を契機に四階に新しく開設された中央アジア室の図録に該当する。壁画一八件二四点をはじめ佛画九点など、一二一件の展示品がカラー図版で掲載されており、付録として「新羅古墳出土中央アジア遺物」六点を合せて紹介すること、古代韓国文化と中央アジア文化との関連性を説明している。巻末の概説部分は権寧弼の論文「中央アジア美術——その普遍性と特殊性——」と作品解説とで構成されている。作品解説も権寧弼の執筆によるものである。

③

権寧弼「中央아시아美術——그 보편성과 특수성——」『中央아시아美術』(三和出版社、一九八六年八月)

②の図録『中央アジア美術』に載っている論文で、中央アジアの地理的条件によって形成された諸々の異質な文化の混成文化的普遍性と、中央アジア特有の地域的特殊性を各地域別に説明した後、美術形式と技法に焦点を合わせ、その複合的な性格を論じる。

④

関内勲「ソウル国立博物館所蔵の大谷コレクションに

ついて」『季刊東西交渉』第七卷第一号(一九八八年五月)

大谷コレクションが韓国に入ってくる経緯と、日帝時代における展示および保管状況、そして解放以後における朝鮮戦争を契機にこれらの遺物が釜山および慶州へ移動した状況、一九八六年に中央アジア室の開設による常設展示に至るまでの展示状況を扱う。

⑤

韓国国立中央博物館『韓国国立中央博物館所蔵 中央アジアの美術』(三和出版社、一九八九年一月)
中央アジア室の図録『中央アジア美術』の日本語版で内容は韓国語版と同じ。

⑥

Kwon Young-pil, *The Otani Collections, Orientations*, Vol. 20, No. 3 (Hong Kong: Orientations Magazine Ltd., 1989)

中央博所蔵の大谷コレクションについての概略的な紹介。

⑦

安秉燦「베제클리크 (BEZELIKLIK) 第4号窟 誓願画의 復原」『美術資料』第四三六号(一九九〇年)

ドイツ、印度、ロシア、日本、韓国に分かれて所蔵されているベゼクリク石窟寺院の第四号窟(トゥルファン文物局編号の第一五号窟)の誓願図断片を接合しその復元を試みたもので、合せてその編年を論ずる。

⑧

李相洙・安秉燦「중앙아시아 벽화 보존처리의 새 방향 연구」『美術史学研究』一九七号(一九九三年三

月)

中央アジア壁画の保存処理についてのドイツ、イギリス、日本の処理方法を分析比較し、今後の保存処理の方案を提示した。

⑨

関内勳・梅村坦「国立中央博物館藏 베제크릭壁画 9
구리銘文試釋」『美術資料』第五五号（一九九五年六月）

ベゼクリク石窟寺院の壁画に記されているウイグル語の銘文を解釈したもので、モンゴル高原において摩尼教を国教として信じていたウイグル人が、トゥルファン地域に進出したあと佛教に帰依する時代の推移を総合的に考察しながら、トゥルファン地域の歴史をトゥルク史の一環として接近し、ベゼクリク石窟寺院および壁画の造成年代について、既存の美術史的な様式論以外に、近年のトゥルファン学、特に考古・歴史・言語学との学際的な研究結果をもとに新しい解釈を試みたものである。

⑩

関内勳・安秉燦「国立中央博物館藏 투르판出土文書
管見」『美術資料』第五六号（一九九五年二月）
トゥルファン・アスタナ古墓群のうち、張禮臣の墓（TAM 230）から出土したトゥルファン文書（一名、アンペラ文書）を紹介し、その意味を分析したものである。その内容は、唐代の中央政府が地方の行政組織「嶺南諸州」に対して、庸調の納入の規定を指示した

もので、国家予算の運用の一面を窺うことによって、

律令国家である唐帝国の構造と国家体系が理解できる重要な法制関連文書の断片である。この文書は、現在龍谷大学が所蔵しているトゥルファン文書の断片（大谷コレクションの一部）および新中国成立以降に新疆博物館が同地域で発掘した文書の断片と繋がるものであって、大変興味深いものである。

⑪

関内勳「国立中央博物館藏 투르판出土墓塚 管窺」
『美術資料』第五七号（一九九六年六月）

トゥルファンのアスタナ古墓から出土した六点の墓誌について、麴氏高昌国時代（五〇二—六四〇）の社会を反映する具体的な資料として、墓誌が作られた時代背景、墓誌の性格、墓誌の史料の意味を明らかにしたものである。

⑫

林玲愛「国立中央博物館所蔵西域佛教彫刻研究（1）」
『中央아시아研究』第一号（一九九六年二月）

トゥルファンで出土した菩薩像頭部の造成の背景、出土地、製作年代について論及したものであり、これらの遺物を麴氏高昌国時代において佛教が絶頂に達した七世紀中葉以前のもものと推定している。

⑬

權寧弼「한국의 중앙아시아 미술품 컬렉션
——오타니 컬렉션과 관계해서」『실크로드 미술』
（열화당, 一九九七年二月）

大谷コレクションを新羅の古墳で出土するシルクロード

ド関連遺物の延長線として把握しようとするもので、収集の一貫性と質という点において、これらの遺物を「コリアコレクション」と称することを主張している。一方、大谷探検隊の探検経緯と韓国の大谷コレクションのうち、絵画、彫刻、容器類を中心に、遺物の美術史的 성격について論及している。

⑭

閔丙勳「国立中央博物館藏 투르판出土 伏羲女媧圖放」『美術資料』第六一号（一九九八年一月）

トゥルファンのアスタナ古墳群から出土した伏羲女媧図三点について、これらの遺物の出土状況、将来経緯、伏羲女媧というモチーフの起源、図像の特徴などの問題を、近年のトゥルファン学の成果を踏まえて学際的研究を試みたものである。伏羲女媧圖は、魏氏高昌国時代において王を頂点とする中央集権的社会において、新しい社会意識が墓葬制度に反映された結果として現われたものであり、中原の文化が河西という漸移地帯を経由しながら中央アジアに波及する過程において、どのような地域的変容を帯びながらトゥルファン地域に至ったのか、具体的な考古学的発掘事例を中心に論じている。

⑮

権寧弼・姜友邦・閔丙勳『국립중앙박물관 소장 중앙 아시아 유물에 대한 종합적 연구』(學術振興財団 研究費報告書、二〇〇〇年八月)

韓国學術振興財団の研究費支援(國際協力課題)によ

る研究成果の報告書で、韓国の権寧弼(代表)、姜友邦(彫刻担当)、閔丙勳(絵画及び目録担当)と、中国の王炳華(新疆文物考古研究所所長・当時)、王路力(新疆社会科学院歴史研究所研究員)による共同研究の成果である。

⑯

閔丙勳「中央아시아의石窟寺院과 国立中央博物館所藏 中央아시아壁画——키질 및 베제크리石窟寺院을 中心으로——」『국립중앙박물관 소장 중앙아시아 유물에 대한 종합적 연구』(學術振興財団研究費報告書、二〇〇〇年八月)

クチャのキジル石窟とトゥルファンのベゼクリク石窟寺院に対する調査の経緯と石窟の形制、壁画の編年、図像などを、中央博物館の壁画と関連づけて論じたもの。

⑰

閔丙勳「国立中央博物館所藏 中央아시아 遺物 目録」『국립중앙박물관 소장 중앙아시아 유물에 대한 종합적 연구』(學術振興財団研究費報告書、二〇〇〇年八月)

中央博物館の中央アジア遺物の諸元と形状の特徴などを整理した目録である。朝鮮総督府博物館の中央アジア遺物の整理番号は『新西域記』の附録「朝鮮総督府博物館中央亞細亞発掘品目録」を基にしているが、遺物の名称や時代比定、出土地等に多くの誤謬がある。

この目録は一九九三年より一九九九年にかけて現地調

査の結果をもとに、これらを修正し再整理したものである。

18 関内勲「国立中央博物館 所蔵 中央아시아 遺物

(大谷 컬렉션)의 所蔵経緯 및 研究現況」『中央아시아研究』第五号(二〇〇〇年一月)

④の論文をもとに、大谷コレクションが韓国に收藏される背景とコレクションの意味、そしてこれらの遺物が日帝時代より朝鮮戦争を経て現在に至るまで、どういふふうに関内勲・展示・保存処理されてきたかの問題、いままでも蓄積された韓国における研究成果を時代順に整理し、今後の研究上の問題点などを整理したものである。

19 権寧弼「韓国の大谷コレクション」『季刊文化遺産』

第一号(二〇〇一年四月)

日本の季刊誌『文化遺産』の「シルクロードと大谷探検隊」という特集号に、中央博所蔵の中央アジア遺物の規模、保存状態、展示経歴、研究状況、韓国における学術の意味など、遺物と直接関係ある分野の現状を簡単に紹介したものである。

20 権寧弼「한국의 오타니(大谷) 컬렉션」『레투스양

식의 미술』(사계절, 二〇〇二年二月)

⑬の『文化遺産』に掲載した論考の韓国語版に該当するもの。

21 姜炯台・李谷喜・兪惠仙・金研美・趙娟兌・青木繁夫・

山本記子・大林賢太郎「中央 亞細亞壁画 保存処理(Ⅰ)——壁画(本4074、本4096)의 状態

調査——」『박물관보존과학』제3집(二〇〇二年一月)

中央博と日本東京文化財研究所が共同で遂行した中央アジア壁画研究の一環として、中央アジア・トゥルファン地域の壁画二点(本4074・本4096)に対する保存処理のため、中央博保存科学室がこれらの壁画について行った、肉眼調査、X-線調査、赤外線調査、紫外線調査、彩色顔料の分析、年代の測定、壁画の構造および構成材料等の調査内容を整理したものである。

22 李谷喜・兪惠仙・金洙喆・姜炯台・趙娟兌・青木繁夫・

大林賢太郎「中央亞細亞壁画 保存処理(Ⅱ)——

壁画의 彩色 顔料 및 壁体 造成에 使用된 草材類 調査——」『박물관보존과학』제4집(二〇〇三年一月)

中央博所蔵の中央アジア壁画二点(本4054・本4078)の保存処理のため、中央博保存科学室がこれらの壁画の彩色顔料の成分分析および壁画の支持層を成す薬屑の植物種識別調査の結果を整理したものである。

23 국립중앙박물관 『국립중앙박물관 소장 西域美術』

(한국박물관회, 二〇〇三年一月)

二〇〇三年一月より二〇〇四年二月まで、中央博で開催した特別展「国立中央博物館所蔵 西域美術」の解説図録である。この図録には、中央博所蔵の中央アジア遺物一七六件四六二点を「宗教文化」「日常生活文化」「埋葬文化」の三章に分け紹介し、開催時点までの現地調査と研究成果をもとに、詳細な作品解説が掲載されている。各章別の解説と作品解説は関丙勳が執筆したもので、編輯も関丙勳が担当した。

㉒

関丙勳「国立中央博物館 所蔵 中央아시아 遺物の所蔵経緯 및 調査・研究現況」『국립중앙박물관 소장西域美術』(한국박물관회, 二〇〇三・一一)

㉓の論文に補筆を加え新しく整理したもので、特に解放後より朝鮮戦争の終了までの大谷コレクションの具体的な状況を追加して叙述し、研究論考目録も補充させた。

㉔

趙娟兌・李容喜・許尹賢「국립중앙박물관 소장 중앙아시아 벽화 보존처리」『박물관 보존과학』제5집(二〇〇四年二月)

中央博所蔵の中央アジア壁画五点(本4054・本4074・本4077・本4096・本4097)に対する二年余の保存処理の過程を、洗滌、顔料層の強化、フェイシング、木材枠の解体および分離、壁体強化および補強、壁体支持体の付着、フェイシングの除去、額縁の製作および仕上げの順で整理したものである。

㉕

特に、剥落した壁画の顔料層と弱化した壁体の強化、展示のための額縁の構造改善の内容を詳述している。姜炯台・青木繁夫「韓国国立中央博物館所蔵中央アジア壁画の保存」『大谷探検隊将来西域壁画の保存修復に関する総合研究』(東京文化財研究所、二〇〇五年三月)

㉖

中央博が日本の独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所と、中央アジア壁画の共同研究に臨み、壁画保存処理の目的と方法を明らかにしたもの。

趙娟兌・金研美・李容喜・金洙喆・山本記子・大林賢太郎「韓国国立中央博物館所蔵中央アジア壁画の保存処理」『大谷探検隊将来西域壁画の保存修復に関する総合研究』(東京文化財研究所、二〇〇五年三月)

㉗と㉘の壁画保存処理の報告書の内容のうち、壁画の材質状態の調査内容と保存処理の過程をまとめて日本語で再整理したもの。外観調査、X線調査、赤外線調査、木材枠の調査、壁体表面の紙および壁体内部の薬層の調査、加速機質量分析(AMS)による年代測定などの保存処理過程を多くの参考図版とともに詳述している。

㉘

俞惠仙「韓国国立中央博物館所蔵中央アジア壁画における顔料の分析」『大谷探検隊将来西域壁画の保存修復に関する総合研究』(東京文化財研究所、二〇〇

○五年三月)

⑳の報告書の内容を中心に、中央博所蔵のベゼクリク石窟寺院とキジル石窟寺院の壁画八点について、顔料分析の結果を詳細に再整理したものである。顔料の分析には、非破壊分析機である移動型X線蛍光分析機(Artax portable XRF spectrometer)を使用し、各壁画の顔料分析結果が図表で示されている。

㉑ 閔丙勳「韓国国立中央博物館所蔵中央アジア壁画——保存処理及び顔料調査対象壁画を中心に——」『大谷探検隊將來西域壁画の保存修復に関する総合研究』(東京文化財研究所、二〇〇五年三月)

保存処理された壁画五件七点を対象に、現地調査の結果を踏えながら壁画の正確な出処を明らかにし、近年におけるウイグル史について歴史学・言語学的研究成果および保存科学的研究成果をもとに、美術史的な立場から壁画の製作年代を十世紀より一二世紀の間と推定した学際的な研究成果である。

㉒ 민병훈『조원과 오아시스 문화 중앙아시아』(통천문화사、二〇〇五年十月)

中央博の新しい開館(於：龍山、二〇〇五年十月二十八日)を迎え、常設展示図録とは別途に刊行した中央アジア室の室別図録である。第一部…シルクロードと中央アジア、第二部…中央アジアと西域探検、第三部…中央アジア遺物の所蔵経緯と展示、第四部…中央博所

蔵の西域美術の四部で構成されている。第四部では、中央アジアの宗教文化、日常生活文化、埋葬文化を代表する所蔵品一三〇余点を、カラー図版で紹介している。

*

以上で、大谷探検隊によって収集された西域遺物の、解放以降すなわち一九四五年以来の展示および保存処理、調査研究の流れを簡単に整理してみた。

一般に大谷探検隊とその探検を主導した大谷光瑞を、二〇世紀の初めに展開された西欧列強の中央アジア諸探検隊と同じように偉大な人物としてとらえたり、あるいは探検そのものを東洋人による時代の快挙ないし先駆的な業績として評価している。しかし不幸にも当時の日本は、このような画期的探検成果を受けいれる社会的雰囲気はまだ熟していなかったし、これを学問的に接木できるような文化的余力も足りなかった。西本願寺の学僧たちによって収集されたこれらの優れた西域遺物は、結局光瑞師の隠退に伴い、探検の成果が整理される前に四散される結果をもたらし、結果的に韓・中・日三国に分散されているため、コレクション全体についての正確な目録すら作成されていないのが実情である。

中央博に所蔵されている中央アジア遺物には、新中国成立以後新疆地方でまだ発掘されたことのない標本も含まれていて、学術研究上非常に重要な価値をもっている。しか

し上述のように、遺物が分散される過程で作られた目録『新西域記』目録』には、遺物の名称や出土地点についての誤りが非常に多いため、研究に困難をもたらしている。

一般的に考古資料が学術的価値をもつためには、明確な出土地点と時代そして同伴して出土した遺物に対する総合的な理解がその前提条件であるが、中央博および東京国立博物館、中国の旅順博物館等に收藏されている大谷コレクションは、その多くが正確な出土地点および同伴して出土した遺物に関する詳細な情報を欠いている。

目録には、場合によってはタクラマカン砂漠の西南部ホータン地域のヨトカンで出土した紅色の陶器破片をトゥルファン出土と記録したり、トゥルファンで出土する唐風の遺物をホータン出土と表記するなど、常識的に理解し難い内容も少なくない。

したがって大谷探検隊に対する正確な評価とこれに関する研究を促すためには、まず東洋三国の博物館に收藏されているコレクションについて、その全体に対する正確な目録作業が先行される必要がある。そして、その過程で各国の所蔵遺物についての正確な名称、出土地および時代比定の問題などを、国際的な協力のもとで共同して推進する必要がある。またこのコレクションとほぼ同じ地域で収集されたイギリスのスタイン・コレクションなど、西欧諸探検隊の探検成果および新中国成立以降、同地域での発掘成果などを総合的に比較検討する必要がある。

このような基礎作業とともに、探検そのものに対するアプローチも並行しておこなうべきである。大谷コレクションの分散の経緯をはじめその後の状況などに関しては、一九八〇年代に入って本格的なアプローチが行われ多くの業績が蓄積されている。しかしその一方で、探検そのものが軍事目的を帯びていたという視点等については、イギリスやロシアなど当時中央アジアをめぐる^⑥はげしい対立を展開していた西欧列強が、大谷探検隊をどういうふう^⑦に認識していたかを、当時の外交文書などに記録されている内容についても綿密な検討を加える必要がある。

一方、これらの収集遺物に関する研究は、いままで歴史学、宗教学、文献学、言語学をはじめとする考古・美術史学に至るまで多様なアプローチが試みられてきた。その過程で各々の遺物の来歴を明らかにし、それを中央アジア学の一環として意味を与えた優れた論考も少なくないが、隣接する学問領域との間に共同研究を通じて遺物に対する総合的な理解を求めた研究成果はそう多くない。したがって、これからはこれらのコレクションの意味を総合的に理解し、また中央アジアの周辺文化圏との関係を含め巨視的に把握するためには、歴史学、文献学、考古・美術史学をはじめ、言語学、服飾学、人類学、保存科学など、多様な分野の学問による学際的研究の推進が望ましい。

このように探検そのものに対する綿密な検討とともに、各々の遺物に対する学際的研究を通じて性格の究明等によ

つて蓄積された研究成果を総合的に把えたととき、はじめて大谷探検隊とその収集品全体に対する意味づけが可能となるであろう。

注

- (1) 「国立博物館小史」『박물관ニュース』第一号二面、一九七〇年七月一日。
- (2) 金載元「박물관을 내집처럼」『京郷新聞』一九七〇年二月十六日五面。
- (3) 「그림으로 보는 東洋室」『박물관신문』第三七号三面。楽浪遺物と中央アジア遺物で構成された東洋室展示の意味と内容については、崔淳雨「국립중앙박물관 동양실의 유물」『독서신문』一九七四年二月十日、『崔淳雨全集』第五卷「考古齋、一九九二年」に再録）参照。
- (4) 「国立中央博物館移転開館 안내」(2)・중앙아시아室」『박물관신문』第一七六号一面、一九八六年四月三十日。
- (5) 中央アジア室の展示概要については、開館のとき発行された常設展示図録『국립중앙박물관 NATIONAL MUSEUM OF KOREA』韓国語版、英語版、縮約版（출판사、二〇〇五年一〇月）参照。
- (6) 『국립중앙박물관 소장 西域美術』(한국박물관회、二〇〇三年) 図一四、『조원과 오아시스 문화 중앙아시아』(동천문화사、二〇〇五年) 図五二。

- (7) ベゼクリク石窟寺廢の壁画、供養菩薩など(本4049・本4092・本4056・本4083)の四点(『中央아시아美術』一九八六年。図七・八・九・一一)。現在、伏羲女媧図(本4027、『中央아시아美術』一九八六年、図二六)も模写作業が進められている。

(8) 朝鮮総督府博物館で中央アジア遺物を本格的に研究したのは故熊谷宣夫氏であって、特に西域壁画に関する研究論文が多い。

- (9) ①朝鮮総督府博物館『陳列品目録』の五点。②『大谷光瑞氏探検隊発掘品朝鮮総督府博物館所蔵西域遺物写真集』の九十九点。③『朝鮮古美術大観』三(京城総督府博物館)の五十八点。(図録①-③の詳細については、『新西域記』の復刻版「井草出版、一九八四年」刊行の際、東洋文庫の片山章雄氏によって作成された「大谷探検隊中央アジア関係文献目録」を参照)④『国立中央博物館』(一九七八年)の四点(壁画三点、伏羲女媧図一点)。

(10) この遺物目録は、内容の貧弱さだけでなく、中央博にある文書原本と対照してみた結果、多くの誤字が確認された。しかも原本にも誤字が多いことから、この目録が探検当事者や専門家によって作成されたものでないことがわかる。「遺物目録原本は、『中央亜細亜発掘品目録』となっている。(一九一六年度「陳列品納付書」一三〇頁)

- (11) この『中央아시아美術』とは別途に、『국립중앙박물관』(一九八六年八月二十日)には、中央アジア室を紹介する簡略な解説とともに九点の関連遺物写真が掲載されている。
- (12) 『博物館報』第老編第老号(朝鮮総督府博物館、一九二

六年四月) および第弐年第壹号(一九二七年三月)に掲載されている「博物館出版物」のうち、一般陳列品葉書(一三輯)とともに西域品葉書が製作されたことを伝えていゝる。現在、中央博には当時刊行された八枚一セットの中央アジア遺物葉書(朝鮮総督府博物館陳列品絵葉書 第十一編 其ノ一)が残っている。

(13) 中央博の日帝時代古文書のなかには、東京芸術学校長が東洋美術研究の一環としてこれらの西域壁画に対する模本作成を申込んだ申請書(一九二八年三月九日)と、朝鮮総督府学務局長が発行した許可書(同年四月七日)が残っている。

(14) 東京芸術大学美術館には、中央博所蔵の中央アジア壁画と仏画、敦煌の幡を模写した作品一六点が所蔵されている。『東京芸術大学美術館 蔵品目録 東洋画模本V』東京芸術大学大学美術館、一九九九年)。東京国立博物館にも同じ内容の模写本一四点があるが、東京芸術大学の模写本と比較してみた結果、東京芸術大学の模写本を再模写したものと推定される。東京国立博物館所蔵の作品目録は、臺信祐爾「東京国立博物館保管中央亜細亜面模写と長谷川路可」『MUSEUM 東京国立博物館研究誌』第五七二号、二〇〇一年六月)を参照。

(15) ソウル・東京・旅順に分蔵されている中央アジア遺物の総合目録の作成とともに、機関ごとに関連遺物を総合的に紹介する図録を製作し、これを一般に公開する必要がある。中央博は今回の新しい開館を契機に、まだ公開したことのない零細な断片に至るまで全ての資料を分類・整理し、コ

レクション全体を紹介する大図録を刊行する予定である。レクシオンは、大谷光瑞の探検旅行が、日本陸軍の諜報活動と連繫されている可能性を提起(杉森久英「大谷探検隊と軍事目的」『諸君』一三三三、一九八一年三月。同「大谷光瑞」一三五頁)している。またPeter Hopkirkは、『Foreign Devils on the Silk Road』(Oxford Univ. Press, 1984)の第一四章『Spies Along the Silk Road』で、カシュガル所在の英国領事館が、大谷探検隊の第二次・第三次中央アジア探検をスパイ活動の一環として把握し、彼らの活動を鋭意注視していたことを、当時の外交ファイルを用いながら叙述している。

(17) 近年、日本の外務省外交史料館所蔵の大谷探検隊関連文書が公開され、当時西欧列強の間で展開された情報戦のなかで、日本政府が大谷探検隊をどのように把握していたか、その断片的な情報に接することが可能になった。外務省外交史料館の公開文書のファイルのなかには、百頁以上に及ぶ探検隊関連文書が含まれていて、その内容は第二次および第三次大谷探検隊の動向と諸外国との折衝に関する在外公館との連絡内容等で構成されている。(白須浄真「日本政府が見た大谷探検隊」『中国新聞』二〇〇一年二月一日一八面。同「大谷探検隊に関する日本外務省外交記録の紹介——第3次大谷探検隊員橋端超の消息不明問題を中心として——」『中央アジア出土文物論叢』朋友書店、二〇〇四年)